

マイスター・エックハルトにおける 時間論の構造

田 島 照 久

エックハルトは時間概念「今」(*nū, nunc*)を全く異なる二つの意味で用いている。①時間の最小のものでありながら、時間を構成するものではなく、時間の尖端、末端を意味する「時間の今」、②天地創造がなされた「今」であり、一切の時間を包括する「今」であり、互いに近いとされる。①はアリストテレスの『自然学』第八巻第八章および第六章とその箇所に対するトマス注解に基づいたものである。アリストテレスは時間とは、より先・より後という観点から見られたところの、運動の数であるとし、時間は不可分なアトム的时间単位から構成されているとは考えず、無限に分割可能であり、その時間を限定する分割点を「今」と呼び、「今」と「今」の中間が時間であると考ええる。事物が白くなるという生成変化では変化が成し遂げられる極点は先行する時間にいかなる大きさも付加しない終端であるとする。時間の今は生成の終端として、同時に存在の始端として同一の非時間的分割点となる。これが①の「今」である。

②の今はその内で、神が天と地を創造した始原(*principium*)としての、「永遠の第一の単一なる今」(*primum nunc simplex aeternitatis*)と呼ばれる。その内において神が永遠に存在し、さらにまた、その内において神的ペルソナの発出が

永遠にあり、あつたし、またあるであろう全く同一の今(*nunc*)とされる。エックハルトはボエティウスの「初めの果て」と「終わりの果て」を欠く「永遠」理解から両者の「果て」を一致させることによって「永遠」の姿を見ようとする。「始原」である「永遠の第一の単一なる今」は同時に「終焉」であるとされる。この論理構造から永遠における神の業が考察される。神は「初め、始原」において業をなすので、すべての業は常に初めてであり新しいことになる。しかし一方で「終焉」であるから、創造はすでに完了していることになるが、第一の始原性により「絶えず創造しつづける」という仕方での創造に新たに着手し始められていることになる。とされる。「第一の始原性」と「最後の終焉性」の一致により、業は「不断の反復性」を獲得し、「継続的創造」(*creatio continua*) および「継続的出生」(*generatio continua*) が説かれることになる。始原から生じたもの(*principium*)は始原(*principium*)の無媒介な不断的働きによって存在を保たれている。その意味でエックハルトは、魂が体の各部分に全体としてあるように、神はすべての事物の内にあるとするが、しかし神が神本来のあり方をとるのは、天使の内と魂の最内奥と最高所とをにおいては他にないと語り、時間が一度たりとも侵入せず、像がひとつたりとも光を当てたことのない魂の最内奥にして最高所の場合「魂の根底」において神は全世界を創造し、さらに子を生み、その独り子と共にわれわれは独り子に少しも劣らぬことになる」と語る。

エックハルトはアリストテレス、トマスの瞬間としての「今」の理解を神の *esse, creatio, generatio* の場である「始原」の

解釈に導入し、非時間的「今」の「始めの端と終り端の一致」を、永遠における「始原と終焉の同一」としてとらえなおし、さらに「生成と存在の同一」を介して、瞬間における不断の創造・出生を導き出し、「本質的始原論」を構築したと理解できる。その「始原」は「永遠の第一の単一なる今」として、神の像である魂の最内奥、「魂の根底」の概念にそっくり映し込まれているということがわかるのである。

クザーヌスの認識論と宇宙論

——〈否定神学〉を可能にするもの——

島田 勝巳

本発表では、ニコラウス・クザーヌス(Nicolaus Cusanus 一四〇一—一四六四)の代表作、*De docta ignorantia*(= *DDI* 一四四〇)を中心に引き上げ、そこで展開される認識論と宇宙論、および両者の関連性について検討することで、クザーヌスの否定神学思想が、その認識論と宇宙論との独自の内的連関を基盤として成立するものであることを論じる。

神をめぐる議論におけるクザーヌスの関心は、その存在証明ではなく、むしろ存在論的前提としての神についての想像力を喚起させる試みに置かれていたと言える。彼は伝統的に神と呼ばれてきたものを「最大なるもの」(*maximum*)と呼び、「一なるもの」(*unum*)、「存在性」(*entitas*)、「絶対的なもの」(*absolutum*)、「無限なるもの」(*infinitum*)などの概念を神

に互換可能な概念として捉える。さらに注目すべきは、それが「厳密には把握し得ない」という認識論的性質において、「真理」(*veritas*)や「事物の何性」(*quidditas rerum*)をも無限なるものとして、その外延においては神の概念にほぼ等しいものとみなしている。おそらくこの洞察に、クザーヌス思想の〈否定神学〉的性格のもつとも斬新かつ重要な視点が表れている。神と事物との本質的な内的連関についてのこの洞察は、のちに汎神論の嫌疑をかけられることになる。だがもちろんそれは、事物の何性が神と存在論的な意味においても同義であることを意味するものではない。

この問題は、*DDI* 第二巻の宇宙論において取り上げられている。クザーヌスによれば、神は被造物の原因・根拠でありながらも、「存在の形相」として、被造物とはその形相を異にする。被造物の側からすれば、自らは神に対して何も付与し得ない一方で、その存在はすべて神を原因とし、神から来ている。その意味で、被造物は神の「付在」(*adesse*)ではなく、むしろ「からの存在」(*ab esse*)にほかならないとされる。

クザーヌスは神と被造物とのこうした関係性について、さらに「縮限」(*contractio*)の概念を用いて示そうとする。そこでは、宇宙(*universum*)を介した神の個物(被造物)への自己限定という事態が捉えられることになる。だが、クザーヌス自身も警告するように、ここで語られる神と宇宙との関係を、新プラトン主義的なヒエラルキー的イメージで理解すべきではない。クザーヌスにとって、対象的に存在するのは被造物たる個々の事物であり、宇宙は神と個々の被造物との媒介を果